



TITLE:

# 漢語山西方言声調の研究( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

八木, 堅二

---

CITATION:

八木, 堅二. 漢語山西方言声調の研究. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18725>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	八木 堅二
論文題目	漢語山西方言声調の研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究は漢語北方方言に属する山西方言の声調の性質とその音韻的・音声的变化過程及び地理的推移過程を考察するものであり、言語地図を描き俯瞰的な視野から検討する言語地理学的研究とフィールドワークによって得られた資料を微視的に比較検討する音響音声学的研究の二つの研究手法を柱としたアプローチを行う。</p> <p>第一章では中国語における声調の通時的研究の前提を概観し、声調に関する内的変化・外的変化および言語地理学的研究に関する先行研究について触れた後、東アジア全域を視野に入れた音調の地域的特徴の推移の中で山西方言研究の意義を述べる。</p> <p>第二章では山西省及び近隣地域における声調調値の分布地図を作成し声調の地理的分布の形成過程とその推移について考察する。本章は前後二編からなり、前編では主に山西省内の状況について入声の分布を軸に考察し、後編においては舒声の分布について分類基準を詳細にし、範囲を近隣に拡大して考察する。</p> <p>第二章前編ではまず山西省内における入声の調形・調高の分布を描き、その変化過程について特に次濁入声の陰陽調帰属に着目して考察する。山西省の入声保存地域の内、西部から中央部・東南部一帯では入声が中古音の語頭子音（声母）における清濁の枠組みに基き陰調と陽調に分化し、更に次濁声母を有する入声（次濁入）が陰調と陽調のどちらに帰属するかにより類型が分かれている。次濁入の調類分合と調値の分布状況は山西省の省都太原を有する中央部を中心としてABA分布を形成する。他の調類の分布状況にも同様のABA分布が観察されることから、中央部で声調体系が革新され、西部と東南部の連続が分断されたものと解釈できる。第二章後編では、山西省とその周辺地域に及ぶ舒声の分布状況を描き、山西方言と周辺方言との関連を考察する。分析には既存の方言報告から得られる五度制調値を用いるが、調形と調高を分離し、分類基準を詳細にすることで声調が地理的・音声的に連続的に推移する過程を明らかにする。各調類の調形の分布状況を見ると、平板調と上昇調の分布の間には緩上昇調が分布し、上昇調と下降調の分布の間には下降上昇調が見られるというように、異なる調形類型の分布境界付近には両者の中間的な調形が分布する傾向が見られ、調高についても同様に、高・中高・中・中低・低と連続的に分布が推移する傾向が認められる。また北方方言全体における調形と調高の関係として、平板調は高調、下降上昇調は低調となる傾向が強く、調形変化と調高変化は大局的には連動している可能性がある。</p> <p>山西東南部は北方方言における主要な声調体系の分布境界地域の一つであるが、北方方言最多の単字調七声調体系が見られる一方で、大規模な声調簡素化が進行し、山西方言最少の三声調体系も見られる。第三章では特に多様な合流類型が見られ、声調の変化動態を観察するための好条件を備える沁源县近隣において地点密度を高めた単字調調査を行い、声調曲線に基くミクロなレベルで声調変化の過程を考察し、ピッチ曲線が地理的に連続的・漸進的に変化していることを示す。さらに調類の合流後と合流前の体系を比較し、合流後の体系における調形の自由変異形には合流前に存在したと推測される二種の調形に近いものが見られる一方で、合流前の体系においても両調類の自由変異形として相互に接近した調形が見られること、さらにその合流形には双方の調形を合わせたような調形も存在していることを指摘する。</p> <p>第四章では三種の声調合流様式の交錯地帯となる沁源县交口郷において単字調の世代差調査を行い、この地域において調類合流が実際に進行していることを示し、変化の方向性を明らかにする。また知覚実験によって、合流の進む調類間の弁別成績が悪</p>			

いことを示し、知覚面からも合流が進行することを明らかにする。単字調の世代差調査からは、交口方言の調類は老年層では七声調を区別していたと考えられるが、清去・濁去の合流は老年層ではほぼ完成し、清入と濁入、清上と清平、清平と濁平の合流が平行して発生していること、清入と濁入の合流は若年世代ではほぼ完了し、清平・濁平の合流も増加傾向にあること、清平・清上のみの合流は若年世代では一旦減少するが清平・濁平・清上の合流する新たな変化が進行していることなどが明らかとなる。さらに交口郷において45人を対象とした弁別実験を行い、聴覚面からも合流が進行することを裏付ける。調値のピッチ曲線に基づく観察からは、各調とも前世代の特徴を引き継ぎながら連続的に変化していることが明らかとなるが、必ずしも一方向の変化のみとは限らず、相反する方向への変化が同時に出現する場合もある。それらは自由変異的に出現する傾向を有している。また、合流の進行とともに合流先の調類の調形との相互接近が見られ、結果として双方の特徴を兼ね備えた調形が出現する場合がある。さらに、平板化していく傾向も見られるが、それは合流によって生じた余剰な調形特徴をそぎ落としているものとして理解することができる。

第五章では変調調形について調類分合型を分けて地図を作成し、単字調調形および単字調合流の地図と重ねあわせ、その関連を考察する。前字変調の地理的分布の状況からは、特に単字調において合流の進む清平と濁平及び清平と清上において単字調と前字変調の同一調形が地理的に連続して分布する傾向が示される。また西北部などでは、単字調では単一の調形となるが前字調では異なるタイプの調形となる場合があり、単字調におけるかつての分布状況の違いが前字調の分布に反映されていると考えられる。山西省内における前字変調の変調類型には、清平と清上が後字となる場合に前字に対して共通の変調をもたらすタイプが東部から東南部を中心に分布し、清平と清上の接近過程の一側面となっている可能性がある。清平と清上の単字調形は、山西全般において類似した分布傾向を示すが、前字調調形についても両調類で類似した分布傾向が看取される。濁平・去声の前字調の分布は清平・清上と比べ分散的となるものの、舒声全調類の前字調の分布を通して中部には平板調が、東南部には上昇調が多く分布する傾向が見られ、これらの地域において単字調調類の合流が多角的に進み、単字調の調形にも接近・画一化が見られることと合わせ、声調簡素化の進行を示すものと考えられる。

第六章は前後二編からなり、それぞれ山西東南部における二音節声調の実態と変化の過程を現地調査の結果に基き考察する。前編では、単字調において七声調体系を有する長治故南方言と清平と濁平、清入と濁入で合流の進む沁源王陶方言の二音節声調の体系を、特に高低の差を重視して比較分析する。結論として、大きく異なる声調体系を有する両方言が、二音節調に見られる合流の方向性に共通部分を有し、高調連続の回避規則、低調連続の回避規則、清平・清上・清入が隣接音節となる場合に働く変調規則に共通性が見られることを指摘する。第六章後編では王陶と故南の中間に位置する沁源交口方言の三世代の二音節声調において、特に調形を重視して世代間の異同と、王陶・故南方言との比較を行う。交口の二音節調の世代間の共通点として、去声前の全ての前字調において音節後半部の調高の低下が見られる点、去声の調形が、後音節及び去声前に於いて下降調が強く出現し、その他の場合には下降的特徴が弱化する点、上声に前接する前字調の清平と濁平に上昇調が出現する点、清平・濁平・清上の調形の接近・合流が挙げられ、相違点には、清平と上声が隣接音節に対して有した変調規則の弱化があげられる。

第七章では、沁源县交口方言の二音節前字調の世代変化をピッチ曲線に基き考察する。前字調におけるピッチ曲線の世代間変化には単字調に先行すると考えられるものも一部見られるが、基本的には単字調と同様の変化様式を有しているものと考えられ、世代間でピッチ曲線が一定の共通部分を持ちながら連続的に変化している。一方で単字調と前字調の変化過程には差異も存在し、単字調では自由変異的に出現してい

た調形が、前字調の場合は後音節の調類を条件として条件変異的に出現する傾向が見られる。これは同一の調値が潜在的に有する異なる方向への変化の可能性が単字調においては調類合流の進行・回避等の要因によって自由変異的に顕在化し、前字調においては音節位置や後続音節の影響によるものとして解釈できる。

第八章では本研究の成果と今後の課題をまとめる。研究の成果として、山西近隣における声調の分布様式、調形と調高の関連性と独立性、声調の変化の地域間・世代間における連続性、調類合流の進行とその方向性、ピッチ曲線の変化過程、単字調と二音節調の地理的分布における関連性およびその声調変化過程の異同、二音節調における声調調整規則等を明らかにした。

論文全体の総括として、声調の変化が体系内部に存する内的要因と方言接触による外的要因双方の調整の下に進んでおり、その変化の過程は多様で方向性についても一様とは限らないが、声調の簡素化という背景が山西省の声調変化に見られる多様な方向性を集約する上で重要な役割を果たす点を指摘したのが大きな成果である。今後はこの成果を踏まえ、入声舒声化や轻声の発達といった漢語音韻史上の重要な問題について、さらに、漢語方言全体に及ぶ声調の通時的変遷過程を解明するなどの課題については今後の課題となる。

(論文審査の結果の要旨)

山西省は中国華北に位置し、東は河北省、南は河南省、西は陝西省、北は内モンゴル自治区に隣接する。そこで話される方言は、中国北方方言の中でも音声や語彙の方面で独自の特徴を多く残している。例えば、この山西省を主たる分布域とする晋方言は、他の北方官話方言では早くに失われた中古音入声韻尾を声門閉鎖音として保存する地域が多い。そのような保守的特徴を有する一方で、北方方言においては通常区別される陰平声と陽平声が完全に合流するなど、他方言よりも革新的な合流が進行していることも知られている。本論は、山西方言の声調が有するこのような保守的側面と革新的側面に着目し、現在進行中の変化の法則性を明らかにし、ひいては中国北方方言の声調の、歴史的変遷の過程を考察する手がかりを得ようという企図のもとに執筆された。本論の柱は、山西省を中心とする華北地域の言語地図を描く言語地理学的手法と、論者自身が現地で実施した方言調査で得られた声調データの分析、この二つである。特に本論の主要部分を構成する声調データのピッチ曲線の分析は、すべて論者が数年にわたって現地で行ったフィールド調査に基づく一次資料を用いており、本論の優れた特徴となっている。論者はまず、先行研究が蓄積してきた既存の北方諸方言の声調データに基づいて言語地図を作成する。分類基準として、声調調形の特徴を五度制表示をもとに、平板・上昇・下降・降昇・昇降、さらに声調曲線の傾斜程度により、例えば弱昇強降のように細部にわたる特徴によって分類し、そしてそれらが音域の低・中・高域のどこに位置するか、これらの条件を加味して極めて詳細な言語地図を作成した。その俯瞰的調査により、論者は、山西省の多様な声調調値のばらつきは、同一調類内でピッチ特徴を部分的に共有しながら、地理上に漸次的に変容していることを明らかにする。また遠隔的に分布する場合も言語地理学で謂う所のABA分布を示すことから、遠隔分布間にも連続性が存在することを指摘した(第二章)。これら言語地図による分析結果に基づき、続いて論者は、山西省内で最も少ない三声調体系の分布地域である西南部と、最多の七声調体系が分布する東南部にいかなる連続性が存在するかを明らかにするため、その中間地点に位置する沁源・長治を中心に地点密度を高めた綿密なフィールド調査を実施する。調査は数年に及んだ。そこで得られた声調データをピッチ曲線に基づき体系づけるとともに、この限られた地域内の各所で、清平と濁平、清平と清上、清去と濁去などの調類が、相互に似通った調値曲線を共有する形で合流する現象が、個別に同時発生していることを見出した。そして、それらの合流現象が、同一地点で同時に起きるならば、入声と、すべて合流したそれ以外の声調という二声調体系が生まれること、さらに西南部で進行している入声の舒声化(音節末声門閉鎖音が脱落して他の声調に合流する現象)が加わるなら、実に単音節では声調に弁別機能が失われる可能性が生ずることを示してみせた(第三章)。論者は当該地域のこの現象を世代差からもあとづけるため、沁源県内で複数の声調合流タイプが接触し、地理的にも主要幹線道路の交接地である同県交口郷の老中若三世代計45人に対して、ピッチ曲線分析と聴覚認識調査の双方を実施し、曲線の相違と聴覚認識の間に有意な同調傾向が存在することを明らかにした。一方で、ピッチ曲線では異なる調値と見なし得るにもかかわらず話者は同音と認識する、またはその逆という現象も一定の割合で存在することを見出し、合流にせよ分化にせよ、そこには調形の接近という事実があることを指摘した。論者の分析では、声調調類が合流している場合、音節の自由変異形に合流前に類似する調形が出現し、調類合流が未完了の場合においては、両声調に相互に接近した調形が、やはり自由変異形として観察されるという(第三章・第四章)。これは、三声調から七声調までが隣接しつつ展開する山西省方言の声調体系の現状を考察する上で、極めて重要な指摘であり、今後十分に参照される価値のある本論の成果の一つである。論者は、ここまで

の成果を踏まえ、続いて二音節連読変調における調類の分合について、独自の方言調査に基づき、変調規則の分析を行う。中国方言学では、連読変調は過去に当該単字調が有していた古い調形を反映すると見なされることが一般的だが、同じ単字調が隣接地域で合流あるいは分化という現象を見せる山西方言では、連読変調の調形にも、過去の調形と今後の変化を暗示する調形の、二種類のタイプが出現していると指摘する。特に、山西方言における声調体系の簡素化と、複音節語彙における調形の接近と合流には、顕著な同調現象が存在することを端的に指摘したことは大きな成果である（第五章～七章）。著者はこれらの変化は、方言の体系自体が有する内的要因と、方言間の接触による外的要因との双方の調整のもとで進行していると主張する。現地において長期間緻密な方言調査を実施した成果として、傾聴に値する議論であろう。

以上、大きな意義を有する本研究であるが、論文内で達成できなかった課題も有る。山西方言の入声舒声化や複音節語彙における軽声化などについても今後考察を進め、北方官話方言の声調発展史に関して重層的な研究を進めることが必要であろう。しかし、それらは今後論者自身が研究の中で明らかにすべきことであり、本論の成果を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成27年2月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。